Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

ファッションタブロイド誌「ハ〜イ！ファッション」創刊に向けて

社会福祉法人銀河の会　ミルキーウェイ
平川 めぐみ（企画・制作）
眞鍋 亜希子（デザイナー）
水原 優香　（写真撮影）
池田 三知代（ヘアメイク）

写真提供：高松市障がい者アートリンク事業

ハ〜イ！
Fashion

さきり織を使って個人の衣装を製作し、撮影を行ないました。
メイクした瞬間の皆さんの表情、一変した現場での空気、各個人が主人公となって光を放つ様子がしっかりと写真に写りこんでいました。
「ファッション」という言葉の本質的な意味、社会における限定的な価値観を広げていくことができるのではないか。その様子を関係者の中で留めておかず一般の社会に対して訴えていく媒体を作りたいと考え、新しいファッション誌を企画しました。

各回でテーマを決めてフォーカスした写真を主に構成。
令和4年度では、全4回のテーマで発刊を進めてきました。
実際のショーの様子、関わる人々の生の声、デザインから派生していく人形の衣装の展開などを追って、思っているけどなかなか伝えられない声をカタチにしていく、outlaw な誌面づくりを目指します。
やはり、人は表現したい生き物なのではないかと感じました。
その皆さんの姿と、それに至る経緯や背景を伝えていくことができればと思っています。
▷▷全国のショップ・ギャラリー・カフェなどで配布予定。
継続的な活動のため協力企業様、設置店舗様を随時募集しております。

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

YAGULT+　ヤグルトプラス

TAGデザイン
SIZE. 40×80mm
COLOR. WHITE ／ BLACK

バッグブランドのニューラインを作る！！

障害者支援施設ウインドヒル
障害福祉サービス事業所サン
千葉尚実　（美術家、バッグブランド主宰）
Bon Do　（グラフィックデザイナー）

美術家として作品を作り、アートリンク事業に参加する一方、バッグの縫製の仕事をしていた経験から、自身のバッグブランドYAGULT（ヤグルト）を立ち上げました。普段はシンプルでミニマムなデザインのバッグを作っていますが、施設の方達が描いた絵をバッグにしたらより自由で面白いものができそうと思い、ニューライン YAGULT+を作ることにしました。面白い絵や字を見つけて編集し、日常使いのモノにアウトプットして、社会と施設の人たちの表現をつなぐ、持ち歩くものを動く広告に見立てることで、街の景色を少し変える試みができたらと思います。

今回はこれまでの関わりで、「バッグになった時に素敵になりそう」な絵を描く方を2つの施設から数人選抜し、布に直接絵や字を描いてもらいました。その布に合わせてフリーハンドで裁断、縫製。その時の私自身の感覚を大切にして、全て一点物のバッグを作りました。商品タグは、利用者の人にブランドロゴを描いてもらい、グラフィックデザイナーの Bon Do さんにデザインをお願いしました。こうして出来たバッグを持って、モデルによるスタジオ撮影、街行く人たちにバッグを持ってもらうロケ撮影をしてきました。

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

YAGULT

ヤダルト＋

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

野菜大好き！ワークショップ

クリエイティヴハウス　パンジーV
アオイアツシ（画家、版画家・デザイナー）
守屋 友加里　（立体刺繍作家・染色家）

パンジー V では、利用者の皆さんが無農薬野菜を栽培し、地域の市場などで販売し、味、品質共に好評を得ています。安心安全な食を提供するパンジー V の野菜のブランディングにつながる活動をしたい。より多くの方に知ってもらいたいと、さまざまなワークショップをし作品を制作してきました。パンジー V の野菜を通し、野菜好きはもっと好きに、苦手な人は少しだけ好きになってもらえるきっかけ作りとなることを期待しています。

野菜を使用して糸を染め、立体刺繍でアクセサリーなどの作品を制作している染色家の守屋友加里さんに、利用者の皆さんに糸を染めるワークショップをお願いしました。
染める材料には、パンジー V で収穫された人参の葉とローズマリーを使用。
野菜に対して、私たちは主に「食べる」ことでしか接する機会がありませんが、「染める」という普段とは違ったアプローチで人参やローズマリーを感じていただければと思います。

素材：人参の葉、ローズマリー、刺繍糸

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

ワークプラザたんぽぽ　うどん屋デザイン計画

ワークプラザたんぽぽ
アオイアツシ（画家・版画家・デザイナー）

デザインを作成するために、メンバーたちは、「たんぽぽ」「うどん」の絵や文字などを描きました。店の雰囲気や施設のメンバーの明るさを活かすことができるよう配置しました。貼絵が得意な人は、貼り絵で家紋状のうどんのマークも作成し、のれんに配置しました。

ワークプラザ・たんぽぽでは、毎週水曜日うどん店を営業しています。施設のメンバーの明るく楽しいイラストを使用した暖簾・のぼりを設置することで、普段は無い印象的な意匠が、週一度だけ突然現れることを想像しました。
デザインを通して「あれ？何があるのかな？」と、水曜日だけ営業のうどん店の存在を知らなかった人たちにも興味を持ってもらい、「行ってみたい」という流れを生み出し、地域と施設の間に新たな接点が生まれることを期待しています。

のぼり　：施設沿いの大通りに設置
W600×H1800mm　素材：テトロンポンジ

のれん（外部）：施設入口の大型のれん
W1800×H800mm　素材：シャークスキン

のれん（内部）：施設内部にある店舗入口の小型のれん
W1000×H800mm　素材：シャークスキン

フロアボード　：施設入口から、店舗入口までの通路壁面に設置。絵柄はうどん
A3サイズ ×7種　素材：紙、ラミネート

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

たんぽぽ
うどん
Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

画と言葉を組み合わせたオリジナルクッキー「ぼくとはなそう」

海太郎（アーティスト）
杉本 克敬（パリスタ）
清水 直人（デザイナー）
多田 彩　（手書き文字）
長谷川 和美（詩人）

アーティストの海太郎さんは、障がいの特性から言葉でコミュニケーションがとりづらいことがあります。でも彼は絵画を通して何かを伝えようとしていて、私たちはその絵画からなにを感じるのでしょう。彼の呼びかけ（絵画）に私たちはどう受け応えるのか（言葉）、このズレが生まれるように感じられるやり取りを通して絵画と言葉の対話がどのように発展するのかを体験し、コミュニケーションの多様性と可能性を探りたいと思います。

海太郎さんはフリーテーマで「画」を書きました。また詩人（長谷川和美）は、ワークショップを通して参加者とともに、画から「言葉」を引出しました。デザイナー（清水ほか）がそれらを編集し、食べられるオリジナルシートとしてデザインしました。そしてパリスタ（杉本）がクッキーを作り、食べられるオリジナルシートを使った商品としてまとめました。今後は、個人や作業所などで生まれる表現を、食を通じた新たなつながりとして、社会に広げていきたいと思います。

※「食べられるオリジナルシート」は、食用インクで印刷し、デンプンでできています。

A. おやつにぺったんシール
「ぼくとはなそう ver.」6種
（食べられるオリジナルシート）
（くっろごう／バランスバランス／ゆうきをだして／まってるよ／ぐっすりおやすみ／たべてみなきゃわからない）
素材：デンプン、寒天、食用色素
仕様：1シート入り（図案 3×3 センチ・12面／シート）税込 650 円

B. ぼくとはなそう
（食べられるオリジナルシート貼付済クッキー）
素材：食べられるオリジナルシート、バター、小麦粉、砂糖、アーモンドプードル、全卵、食塩、香料
仕様：4 枚入り（上記6種ランダム）
約 40g 個包装　税込 450 円

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

画と言葉を組み合わせたオリジナルクッキー「ぼくとはなそう」

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

地域や環境の循環を目指した「土佐和紙折り紙食器」

一般社団法人こうち絆ファーム／
　チームあき・チームいの
いの町あったかふれあいセンター
特定非営利活動法人ら・ら・ら会
鹿敷製紙株式会社
松岡美江（美術家・デザイナー）

高知県いの町で育った原料をいの町で製造し、地域の活性化や雇用なども含む、人や社会・環境に配慮した商品です。
製造面では、地域や福祉を巻き込み、高齢化する伝統産業の次世代を担う新しいチーム作りを考えました。
本商品は、和紙で包む、折る、贈るといった日本古来の技法と文化を受け継ぎ、贈り物から日用品まで様々な用途に繰り返し使えます。また、防災グッズとして、もしもの避難生活にも活躍できるものを目指しました。

ご祝儀袋や非常用の食器など、折り方によって様々な使い方が繰り返しできる食品に安全な撥水撥油性加工を施した土佐和紙ラッピングの製造。
紙の町として有名な高知県いの町。そのいの町産の土佐和紙を通じて「作る」「使う」両面で、地域や環境の循環につながるような新しい商品を作りました。
製造工程を分業し、地域や福祉との連携を一から作り、商品づくりだけではなく、高齢化する伝統産業を担う新しいチームとして農福連携を図ります。

素材：土佐和紙（鹿敷製紙）
大きさ：約 295×420mm

プロジェクトの詳しい情報はこちら→

地域や環境の循環を目指した「土佐和紙折り紙食器」

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION